

「竪穴住居の復元模型ができました」

竪穴住居とは、地面を掘りくぼめて床をつくり、柱を立てて、土や草などを用いて屋根をふいた建物のことです。日本においては、縄文時代から弥生時代まで盛んにつくられ、一部では平安時代ころまで続きました。

地域交流センターの展示室には、発掘調査によって発見された約千八百年前の竪穴住居が床下に展示されており、ガラス張りの床から見学することができます。このような床下展示は、県内では唯一のもので、子どもたちの遊び場として人気スポットの一つとなっています。

しかし、これまでの発掘調査された状態を示す床下展示では、当時の建物がどのような姿をしていたのかをイメージすることが難しい状況でした。このため、模型をつくり、当時の様子を復元することにしました。模



型は十分の一の大きさで復元しており、発掘調査の成果をもとに住居の周りの土手を再現し、雨などが簡単に入ってこないように工夫されていることが理解できるようになりました。また、屋根の一部は取り除いており、

内部の様子を見ることができるようになっています。

この竪穴住居は、同じ時代の住居とお墓がつくられた場所との間にある広場に単独で建てられており、当時としては大変貴重な青銅鏡（和歌山県指定文化財）が出土していることから、お祭りなどを行う特別な建物であったと考えられます。このような建物の性格をふまえ、今回の模型の製作にあたっては、鏡をかかげる人物と、その前にひざまずく人物を再現してみました。地域交流センターでは、竪穴住居の発掘された状態を知ることができる床下展示や発見された実物の青銅鏡や土器などと併せ、当時の建物の様子を示す模型を常設展示していますので、お近くにお越しの際はぜひご見学ください。

